

令和元年 8 月 31 日(土) アトリオン地下 1 階 多目的ホール[A]を会場に今年度第 2 回目の放射線安全管理セミナーが開催されました。

会員と賛助会員を合わせて 29 名の方に参加していただきました。

来年 4 月からは医療法施行規則が改正され、CT の被ばく線量管理・記録や患者に対して被ばくに関する情報提供が義務化されます。これらの対策のひとつとして、自施設の CT 検査時の被ばく線量を把握するためのツールとして国立研究開発法人放射線医学総合研究所、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構、公立大学法人大分県立看護科学大学の 3 機関による共同研究によって開発された WEB システムによる「WAZA-ARI」を用いての被ばく線量評価が有効であることから、午前はその操作方法を習得するため、市立角館総合病院の野呂 和香菜会委員より操作方法の解説を行った後、各自の PC を使って実際に数値を入力して操作方法の実習をしました。なおこの際、会場が地下 1 階であったため、Wi-Fi の受信機を準備したものの安定した通信環境を提供することが出来ず参加していただいたみなさんにご迷惑をお掛けする事態になり、満足のいく実習が出来なかったことをお詫び申し上げます。

その後、北秋田市民病院の湯瀬 直樹会員からは、当技師会の放射線安全管理委員会の委員で今回のセミナー参加者のために作成した医療被ばくを正しく知っていただくための患者向け参考資料の解説を行っていただきました。

午後は、公益社団法人 日本診療放射線技師会 被ばく相談分科会会長 小松 裕司先生を講師に「なぜ被ばく相談に『傾聴』が必要なのか？」をテーマに講演が行われました。

小松先生は、「患者自身やその家族などの相談者が放射線被ばくの説明を求める時に共通しているのは、被ばくに対して少なからず不安を抱いているということであり、我々が質問を受けた時にその質問に対して直ぐに答えを出したり、「大丈夫ですよ」と決めつけたりすることは望ましくないことであること。この様な対応は安心できないばかりか、かえって不安を煽ってしまう可能性があること。そのようなことから心理的不安を伴う放射線被ばく相談への対応として、傾聴を導入した放射線カウンセリングの必要性がある。」とお話しされました。

講演後は、4~5 人程度のグループに別れ、一人ひとり数分間ずつ技師役、相談者役、観察役になり評価者からどの様な対応が望ましいかアドバイスを受けながら『傾聴』の実践を行いました。最後に参加者全員で行った振り返りでは、『傾聴』の難しさ、大切さに関して様々な視点から活発な議論が行われました。

文責 小林

